



加藤 元の



と暮らして
みませんか

5

子犬の健康を守る上で病気予防は大切な問題です。特に、こわい伝染病や病気はなんであれ、獣医さんで予防してもらうことです。

子犬を飼い始めるのは60日前後が最適ですが、この時から動物病院で必要な予防接種と栄養、しつけについて相談しておくことをお勧めします。

具体的にはジステンパー、パルボウイルス症、インフルエンザ、犬伝染性肝炎などです。

かかりつけの獣医さん（ホームドクター）がいますと、こうした病気の予防としつけの計画が立てやすい上に、その都度、成長の

予防接種と避妊

悲劇を生まないために

度合いや歯をチェックしてもらえ、利点があります。また、“社会化” やしつけに問題がないかについてもみてもらえます。平素の観察としつけの良しあしが、子犬の一生にものをいうのです。

また、子犬はすぐに思春期を迎えますので、避妊についても考えておく必要があります。これまでは生後半年ぐらいが手術の目安とされてきましたが、今は70-90日の間にオスは去勢手術、メスは避妊手術を行います。早い方が犬にとっても手術がラクなうえに、健康でより長生きできることもよくわかっていくからです。

さらに、しつけがしやすくなり、乳がん、子宮がん、卵巣がん、オスでは前立腺や肛門周囲の病気、ヘルニア、生殖器のガンなど完全に予防できることも明らかにされているのです。

いずれにしても、人間に祝福されないで生まれてくる子犬は不幸です。もてあまされ、捨てられ、いじめられて結局、安楽死処分では悲惨です。これでは飼い主の責任と言わざるをえないでしょう。こうした悲劇を生まないためにも、「子犬をつくる」というのはつきりした意志がない場合は、必ず早期に去勢手術、避妊手術をしてやるのが大切です。

（ダクタリ動物病院広尾病院院長、日本ヒューマン・アニマル・ボンド・ソサエティ会長）

《産経新聞2004年5月2日掲載》